

プログラム・ノート

加藤拓未

渡邊順生氏と酒井淳氏のコンビは、チェンバーミュージック・ガーデンで2021年、22年とベートーヴェンのチェロ作品群を取り上げてきた。十分な学究的な考察を踏まえたうえで、ふたりの個性がぶつかり合うような熱演をご記憶の方もおられるだろう。このコンビが、今年は「バッハ」に取り組むという。それぞれの楽器をフォルテピアノからチェンバロに、チェロからヴィオラ・ダ・ガンバに変え、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)のガンバ・ソナタの世界を披露してくれる。

ヴィオラ・ダ・ガンバとバッハ

ヴィオラ・ダ・ガンバは「ガンバ(脚)」という名称が示すように、両脚で挟んで演奏する低音の弦楽器(ヴィオール属)である。バッハのガンバは6弦(D, G, c, e, a, d' = 音の低いほうから高いほうへ、レ、ソ、ド、ミ、ラ、レの順で並ぶ)が一般的だが、時折、7弦の楽器(A線を加えた)を用いることもあり、その楽曲例としては『マタイ受難曲』BWV 244の第34、56、57曲、そして本日演奏されるガンバ・ソナタ第2番BWV 1028があげられる。

形状の似ているチェロと比べると音量は小さく、音色も鋭さに欠けるが、その代わりに柔らかな音色と繊細な響きを持っている。バッハが活躍した18世紀前半では、ガンバは17世紀の盛期を過ぎて衰退に向かっており、むしろチェロに取って代わられる時期にあった。しかし、バッハは1707年(22歳頃)にカンタータ「神の時は最上の時なり」BWV 106で使用して以降、生涯を通してこの楽器を取り上げており、ガンバという楽器を好んでいた様子がうかがえる。

ヴィオラ・ダ・ガンバと通奏低音のためのソナタ ホ短調 BWV 1023

(原曲: ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ)

本日演奏される3つのガンバ・ソナタのように(詳しくは後述)、バッハの時代は作品に手を加え、演奏楽器を変更して演奏することは一般的な慣習であった。本作は、そうした当時の演奏習慣を意識して、バッハのヴァイオリンと通奏低音のためのソナタBWV 1023をガンバ用に編曲したものである。原曲と比べて作品の印象が一変するので、そこが興味深い。

イタリア協奏曲 BWV 971

1735年にライプツィヒで出版された作品。その特徴は本来、複数の奏者で演奏するイタリア様式の合奏協奏曲を、1台の鍵盤楽器による音楽として表現している点にある。たとえば、両端楽章はソロ楽器群(コンチェルト)と、合奏(リピエーノ)が交互に演奏するリトルネッロ形式で書かれているが、その大小2群のアンサンブルを二段の鍵盤で弾き分けて表現している。また緩徐楽章では簡潔な伴奏の上で、ヴァイオリンを思わせる独奏が繰り返され、まさに協奏曲のそれを思わせる。

ヴィオラ・ダ・ガンバとチェンバロのためのソナタ第1番 ㊦長調 BWV 1027、 第2番 ㊦長調 BWV 1028、第3番 ㊦短調 BWV 1029

この3曲のソナタは、バッハがケーテン宮廷に仕えていた時代(1717～23)に作曲されたと定説になっている。なぜなら、当時の宮廷楽団にはクリスティアン・フェルディナント・アーベル(1682～1761)というガンバの名手が在籍しており、バッハは彼のために書いた可能性が高いとされたからである。ただし、この定説を裏付ける確かな証拠はなく、一方で現存する楽譜資料は、すべてライプツィヒ時代(1723～50)、またはバッハの死後に作成されていることが判明しており、近年では作曲自体もライプツィヒ時代の1730年代中盤から後半にかけて行われたのではないかという見解も強まっている。

3曲のガンバ・ソナタは、最初からガンバを想定して作曲されたものではなく、いずれも失われた原曲(おそらく2つのヴァイオリンと通奏低音のためのトリオ・ソナタ)から編曲されたものと推測されている。その主な理由は、ガンバが本来、得意とするはずの重音奏法が、この3つのソナタでは終止和音を除いて登場せず、それが不自然に思われるからである。また、これらのソナタは、原曲の3声部を、ガンバ、チェンバロの右手、左手に割り当てている。そのためチェンバロ奏者は、従来ならば両手で通奏低音を弾くはずのところ、左手で通奏低音を、右手で独立した声部を弾くことになり、二人分の役割を担っている。

トリオ・ソナタは一般に3名ないし4名(通奏低音を鍵盤楽器と旋律楽器の2名で担当すれば計4名)で演奏するが、バッハのガンバ・ソナタは、チェンバロ奏者が二人分の働きをこなすことで、より少ない奏者によって、同様の演奏効果を得ようという意図になっている。これは濃密な音楽を好むバッハならではの傾向の表れであり、ひとりの奏者に協奏曲の音楽を表現させようとするイタリア協奏曲とも相通ずる。同様のコンセプトを持つ作品として、ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタBWV 1014～19や、フルートと通奏低音のためのソナタ ㊦短調 BWV 1030と㊦短調 BWV 1032がある。